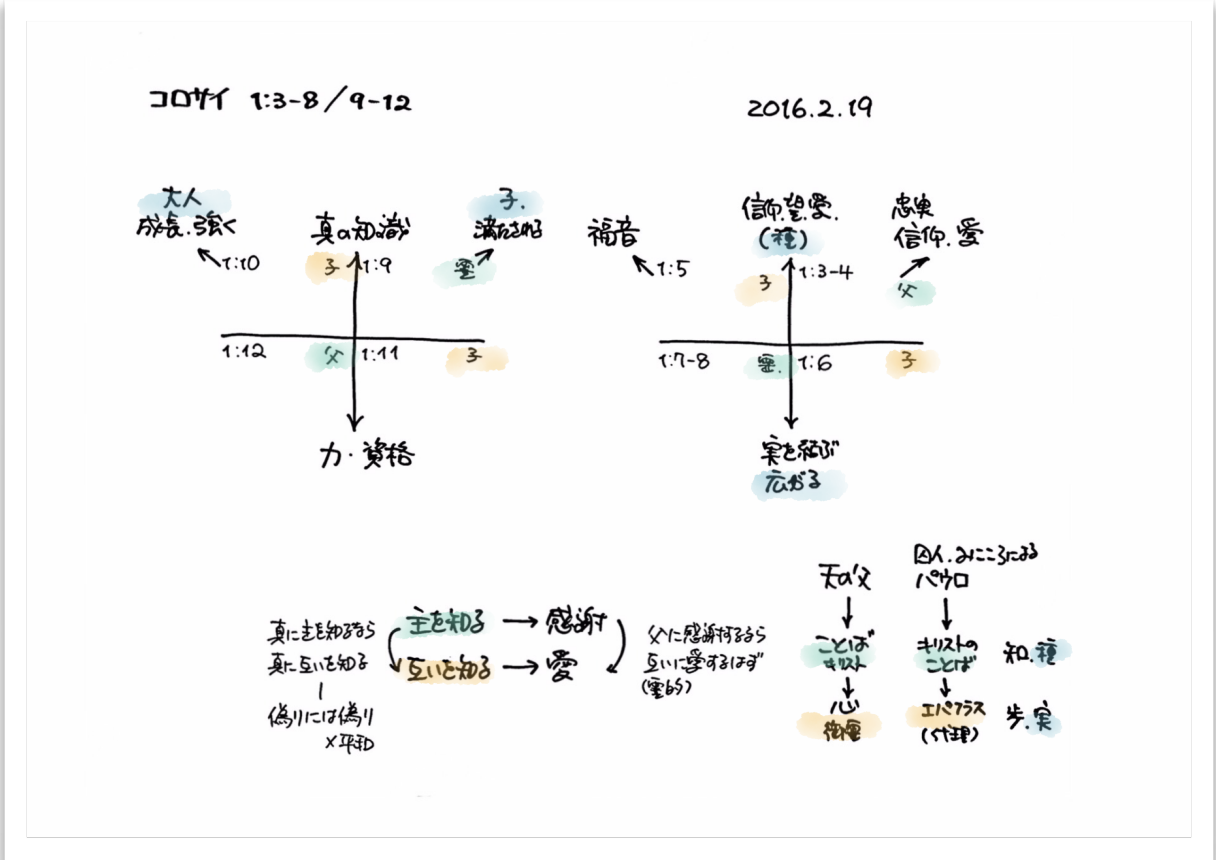
コロサイ人への手紙 1-4章

コロサイ人への手紙



コロサイの手紙を分析しています。

1章の3節から12節を2つに分けて、3節から8節と、9節から12節。ここに祈りがあります。この祈りのところは、真の知識、知恵、理解力、神を知る知識という共通が見えています。それと、栄光ある権能、光の中にある資格などが出ています。1章の3節から8節を見ると、「福音の真理の望み、福音のことばを聞いた。そして広がっている。」ということば。それと愛ということで共通が見えますけれども、まだ苦労しています。

父、子、子、御霊。御霊、子、子、父。父なる神に感謝しますというところで終わっているほうですね。種があって実を結ぶ。子とされて成長する、強くなるというようなつながりがあると思うのですけども、コロサイ全体で、主を知ることと、互いに知り合うこと。この「互いに知り合うこと」がたくさん出てきます。

主を知るなら、真に互いを知ることになるということの反対が、主を知らない、偽りによって主を疑うならば、互いを疑うということで、愛を失うことですね。真に主を知っているなら感謝に至る。感謝することを知らない人は互いに愛することはできませんと。父に感謝するというところから、この兄弟愛、互いに愛するということがスタートする。順番に言うと「主を知るならば互いの愛が深まるはず」ということがコロサイ全体で言われている。知るということが強調されている手紙だと思います。

天の父がことばを送る。ことばは御心を教えると言うことですね。パウロはキリストのことばを送る。「エパフラスが私の代わりです」みたいなことが7節にあります。「忠実な私の代わり、代理です」ということを言っているのが、まるでキリストと御霊の話のように見えます。弟子たち、兄弟たちが広がって、同じ心を持って、互いに知り合って戦っているというのがコロサイで教えられてるところだと思います。